

著者の旅の曲

感動なんか怖くない

Tanaka Machi

文・写真：田中 真知 イラスト：bozen

【プロフィール】1960年東京生まれ。作家・翻訳家。1990年より1997年までエジプト在住。著書に「アフリカ旅物語」（北東部編・中南部編、凱風社）、「ある夜、ピラミッドで」（旅行者）、訳書にグラハム・ハンコック『神の刻印』（凱風社）、「惑星の暗号」（翔泳社）など。



旅

は好きなのだけれど、紀行物のテレビ番組はめったに見ない。

興味のある地域が取り上げられていると見ると鼻白んでしまう。理由は、たとえば以下のようなナレーションにうんざりしてしまうからである。

「村人たちのやさしさが、私にすがすがしい感動を与えてくれた。私をとりかこむ子供たちの瞳は、みなきらきらと輝いていた。日本では失われてしまったほんとうの子供らしさが、そこにはあった。素朴な村の人びととのふれあいのなかで、私は現代の日本人が忘れてしまった何かに気づかされた思いがした……」

テレビ番組だけでなく、旅行記などもそうだが、旅をめぐるボキャブラリーは概して貧弱な気がしてならない。「感動」「ふれあい」「私たちが忘れてしまった何か」「きらきらした目をした子供たち」等々、紋切り型の常套句が、旅を語るエクリチュールには満ち満ちている。

もちろん、実際に心を動かされる体験はあるだろう。しかし、たんに不作法に物をせびりにくる子供たちに「子供らしい」とか「瞳が輝いている」などというのは、たんなる思いこみでしかない。同じことを日本の子供たちがすれば、「し

つけがなっていない」とか「行儀を知らない」といつて批判したりするのだ。インドなどに行けば、たしかにどの子供たちの目も大きくて、きれいだが、そのきれいな目で、平気でひったくりや泥棒をする子だっている。日本だって、目は輝いていないけれど、心のやさしい正直な子はいる。

「ふれあい」という言葉もよくわからない。以前、外国の市場で商品を値切つて買っている場面、現地の人びととのふれあいという言葉が使われている番組を見たことがあったが、これのどこが「ふれあい」なのか。それなら、東南アジアの人たちが、秋葉原で電化製品を値切つて買うのも「ふれあい」ということになる。日本のすけべなおやじが、東南アジアに少女の性を買っていくのも、その意味では「ふれあいの旅」ということになりかねない。

「私たちが忘れてしまった何か」も、アジアやアフリカの田舎の暮らしなどを扱った番組などで、よく聞くフレーズである。たしかに、日本の近代的発展の中で失われてしまったものが、たくさんあるのは事実だ。自然が破壊されて開発が進められ、強固な都市集中システムがつくられ、それによって地域的なコミュ

ニティの力が減退し、人間関係がよそよそしいものになってきた。それを嘆き、反省する気持ちを表現するのに、「私たちが忘れてしまった何か」とか「私たちが失ってしまった何か」という言い方をしているのだろうか。

しかし、この言い方にどこか歯切れの悪さをおぼえるのは、番組で取り上げるような水も電気もない暮らしに戻れというでもなく、日本人はこれからどうしたらいいかというメッセージを打ち出すでもなく、ただ抽象的な思いを口にしているだけに聞こえるからだ。「忘れてしまった何か」では、具体的に何を反省し、これからどうしていけばいいのかも曖昧である。現地の人びとに対しても、日本人に対しても、ひじょうに無責任な言い方に思えてならない。

そしてきわめつけは「感動」である。旅だけでなく、スポーツにしても、映画にしても、日本のメディアはやたら「感動」を強調する。「みなさんに感動をお伝えしたい」とか「感動をありがとう」とか「きつと感動が待っている」等々、感動しなければ意味がないとでもいわんばかりで、ほとんど感動強迫症である。もちろん、感動が悪いものとはいわない。事実、感動的な体験は存在するだ



スーダンの山中の学校で子供たちの大歓迎を受けた

ろう。しかし、情報の洪水の中で、なんでもかんでも感動を強調されると、いいかげんうんざりしてくる。地味な陸上競技を、派手派手しい実況で盛り上げて、無理やり感動に持つていこうとするのはテレビ中継の常套手段だが、これによって与えられるのは感動というより、むしろ利根的な快樂ではないだろうか。

はつきりいつて、現在メディアで使われている「感動」という言葉の九割以上は「快樂」という語に置き換えても、なら差し障りないように思う。快樂が悪いことだとは思わないし、感動という、口当たりのよい曖昧な単語を使うよりも、むしろ率直で、正直である。「みなさんに快樂をお伝えしたい」とか「快樂をありがとう」とか「快樂が待っています」というほうが、事の本質を衝いているのではないか。

そんなわけで、感動強要型のテレビにすっかり辟易していたところ、知り合いからパプア・ニューギニアの島の人びとの暮らしについての映像ドキュメンタリーのDVDをプレゼントされた。「イルカのくる渚」というタイトルから、内容はNHKなどで放送される「なんとか自然紀行」のような内容かなと思ってスイッチをいれた。画面には、南太平洋の美

しい風景と、のどかな島の人びとの様子が映り、つぎに渚に迷い込んでくるイルカの群れが映った。そこまでは、まさに「なんとか自然紀行」そのものだった。

ところが、そこから様子が変わってきた。イルカが渚に迷い込むと、村人たちは何そうものカヌーを出し、渚の入口をふさぎ、それから鉈や棍棒を使ってイルカの大虐殺を始めたのだ。十数頭のイルカを、子イルカも含めて、最後の一頭まで殺す。それから海岸でイルカの解体が始まる。割かれた腹から腸が飛び出し、渚はイルカの血で真っ赤に染まる。そのそばを、死んだイルカの臓物をもって、子供たちが、文字どおり「目をきらきら輝かせて」走りまわっている。

ぼくは口をぽかんと開けて、映像に魅入った。まったく予期せぬ展開に、不意をつかれた思いだった。少なくとも、最初から感動させようという演出のもとにつくられた自然紀行物よりも、ずっと感動した。そのとき、頭の中に、あの「なんとか自然紀行」の女子アナウンサーの声が聞こえてきた。「自然の中にはかならず感動が待っています。日本人が忘れてしまった何かが、ここにはまだ生きています。またひとつ、地球のかけがえのなさを見つけました……」